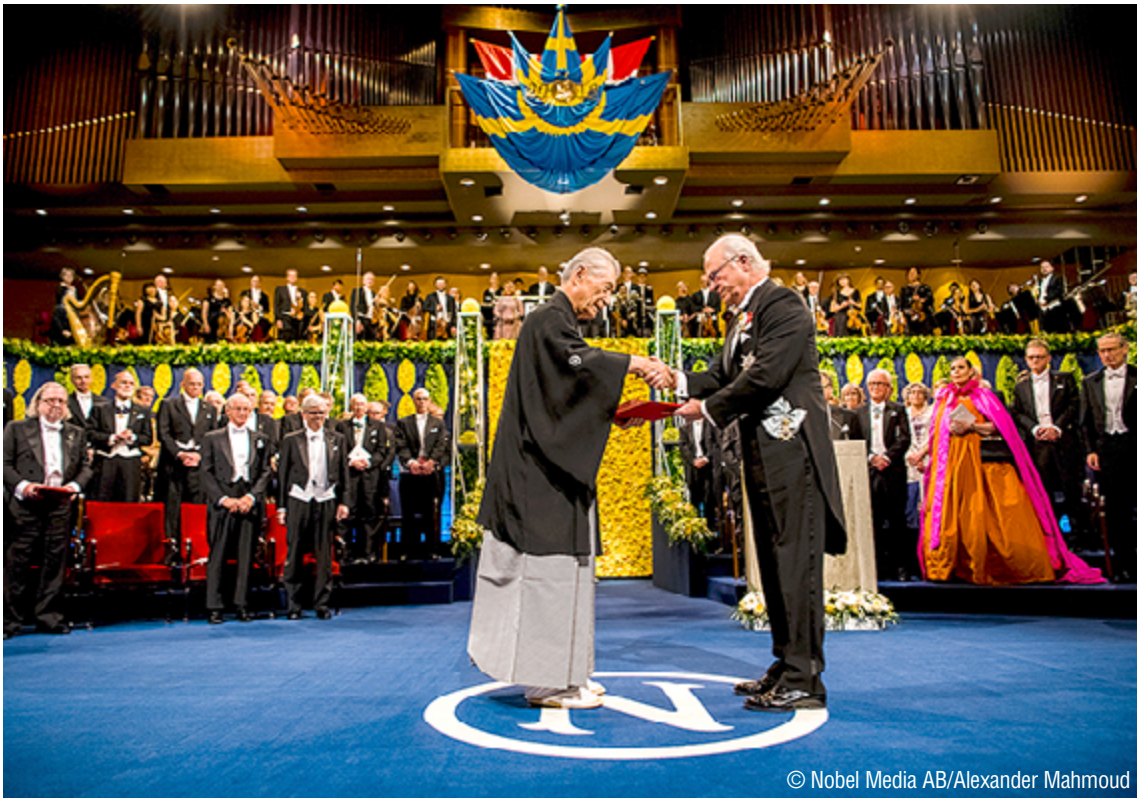


京大 広報

KYOTO UNIVERSITY

本庶 佑 高等研究院 副院長・特別教授， ノーベル生理学・医学賞 授賞式

2019.2
No. 741
号 外



ノーベル賞授賞式でスウェーデン王国カール 16 世グスタフ国王からメダルと賞状を受け取る本庶特別教授

目次

- 本庶 佑 特別教授，ノーベル賞授賞式に出席 5168
- 特別鼎談 in ストックホルム
京都大学で研究すること，その特色と魅力 5169
- 晩餐会でのスピーチ 5176
- ノーベルウィークの本庶 佑 特別教授関連の動き ... 5179



京都大学



本庶 佑 特別教授，ノーベル賞授賞式に出席

12月10日(月)午後4時30分(現地時間)から、スウェーデン・ストックホルムのコンサートホールにおいてノーベル賞授賞式が執り行われ、本庶 佑 高等研究院副院長・特別教授が出席しました。授賞式は、アルフレッド・ノーベルの命日である12月10日に開催され、物理学賞、化学賞、生理学・医学賞、および経済学賞が授与されました。

授賞式には、滋子夫人らご家族のほか、本学から参加した山極壽一 総長、共同研究者の湊長博 理事・副学長を含め、総勢1,500人以上が出席しました。授賞式では、ノーベル財団関係者の挨拶の後、各賞の選考委員から、受賞者とその業績、功績の紹介があり、スウェーデン王国カール16世グスタフ国王から、受賞者一人ずつにメダルと賞状が授与されました。

本庶特別教授は、ジェームズ・アリソン博士とともに、「免疫抑制の阻害によるがん治療法の発見」により生理学・医学賞を受賞しました。グスタフ国王からメダルと賞状を受け取った本庶特別教授は、感慨深い面持ちで、会場の参加者に向かって深く頭を下げ、感謝の気持ちを表しました。



© Nobel Media AB/Alexander Mahmoud



© Nobel Media AB/Alexander Mahmoud

【写真上】ノーベル賞授賞式全景

【写真左】ノーベル賞授賞式に臨む受賞者たち



© Nobel Media AB/Alexander Mahmoud



【写真上】賞状

© The Nobel Foundation 2018

Calligrapher: Susan Duvnäs

Book binder: Leonard Gustafssons Bokbinderi AB

Photo reproduction: Lovisa Engblom

【写真左】メダルと賞状を受け取り、祝福を受ける本庶特別教授

特別鼎談 in ストックホルム

京都大学で研究すること、その特色と魅力



授賞式の前日にあたる12月9日(日)午後(現地時間)、本席 佐 特別教授、山極壽一 総長、湊 長博 理事・副学長による特別鼎談が、ノーベル賞受賞者が宿泊するグランドホテルにおいて開催されました。ノーベルウィークの濃密なスケジュールの合間をぬって約30分間、京都大学で研究する魅力や研究者としての心構えなどについて、リラックスした雰囲気の中にも熱のこもった論議が交わされました。

「常識を疑う」ためにはサイエンスの基礎が必要！

山極 本席先生、ノーベル賞受賞おめでとうございます。

本席 ありがとうございます。

山極 本席先生は以前から「常識を疑え」ということを言っておられました。京都大学は、常識を疑うということをベースにして、さまざまな新しいことをやってきたわけですが、先生にとって、学生の頃から京都大学の学風を受け継ぎながら常識を疑うということをして、新しいものを発見するに至った経緯で一番大切なことは何だったのでしょうか。

本席 私は東京大学で助手をして、大阪大学と京都大学で教授をしてと、3つの大学で給料をもらった人間は、日本ではあまりいないだろうというのが、ひとつの自慢なんです。それぞれの校風というか、環境の違いは感じていますが、京大は個性を重んじるというか、みんなと同じことを言っている、あまり認めてもらえない。それぞれが自分の頭で考えて、議論を戦わせるという雰囲気が非常に感じられました。なおかつ、突飛なことを言っても、尊敬はされないかもしれないけれど、軽蔑もされない。「好きなようにやってみなはれ」という雰囲気が、僕には非常に有り難かった。僕は研究の過程でそれまでの主流とは違うことを言ってきたし、今でも言っていますけれども、それに関して学内の人からとやかく言われたことは一度もなかつ

たし、サポートしてもらえたと思っています。非常に幸せな環境でやれたというのが、今日に至るまでの実感です。

山極 湊さんは今、研究担当理事として活躍されていますが、俗に京都学派と呼ばれるいろいろな流れがありますが、その中に、本庶先生がおっしゃった「常識を疑え」というような息吹は感じられますか？

湊 本庶先生もそうだったし僕らの先輩もみんなそうでしたが、常識を疑うということはサイエンスに対するベースが非常にしっかりしていることだと思うんです。それがあから、AID発見の時もそうでしたが、世界の多くの人が無批判に受け入れているようなことに対して本庶先生が「いや、それは違うのではないか」と異議を申し立てると、生化学や遺伝学で世界をリードしてきたような、非常にベースがしっかりしている人が言うのだから、多少常識と違って「ひょっとしたらそうかもしれない」とみんな必死で考える。それはやはり、常識でないことを支えるためのベーシックなことを若い人たちにきちんとやらせ、その上でいろいろなことを自分で考えさせるという狙いがあったと思います。

山極 私は理学部出身で、今西錦司先生の門下でやってきましたけれども、そこでは常識を疑うというだけではなくて、自分の学問に対して貪欲であきらめない。常識とは違うことをするためには、自分の学問の境界を出て、新しいことに執拗に取り付いていかなければならない。本庶先生は基礎研究が大事だとおっしゃっています。裾野をしっかりと押さえておかないと頂点を究めることはできないと思います。そういうあたりで本庶先生は、ずいぶんご苦労なされたと思うのですが。

免疫学の新しい波は「耳学問」から始まった…

本庶 僕は京大で生化学の早石修先生の指導を受けました。早石先生は当時第一線の生化学、いわゆる代謝化学というものの技術的な考え方をアメリカから持ち込んで、颯爽と登場した



時期でした。それでみんなが憧れたし、私もそのひとりとして育ちました。ところが僕はアメリカに行って、初めて免疫学をやり始めました。正直言って、免疫学は僕にとって未知の学問でした。日本に帰ってきて、東大や阪大時代は、免疫学についてはほとんど「耳学問」でした。阪大には当時、岸本忠三先生や濱岡利之先生など免疫学の大家がおられましたし、京大に帰ってきてからは、湊先生に来ていただいた。そういうところで、僕はどちらかというはずくて(笑)、自分で教科書をはじめから読むということはほとんどせず、耳学問でいろいろなことを勉強できた。京大医学部では他の人のことにあまり干渉しませんが、訊きに行くと

みんな非常に親切に教えてくれる。これは非常に助かりました。湊先生には最も世話になりましたけれども、他の病理の先生や臨床の先生からもいろいろ教えてもらって、だんだん免疫の知識が増え、当初は全く知らなかったがん免疫に踏み込めるようになったのは、全部そういうおかげだと思います。

湊 免疫学は、まだ当時は非常に現象学的で、はっきり言えばかなりやわな学問だったと思うんです。学会などでも、当時はなんとなくいろいろな遺伝子の話が出てくるけれども、まだゲノム解析もそれほど進んでいないし、茫漠とした話の上にストーリーを作り上げるという風潮がありました。そこに本庶先生が非常にクリアな技術と問題意識を持って京大に帰って来られて、きちんと遺伝学的な根拠を尋ねられたり、ぐいぐい切り込まれると、みんな必死に考えるようになった、というところはあったと思います。当時、多田富雄先生という一世を風靡した先生がおられて、僕から見れば感覚的な免疫学をやられていた。それは非常に面白いんです。面白いけれども、たとえば分子的な基礎や遺伝学的な基礎はいまひとつはっきりしない。免疫学は現象論も込み入っているし複雑で面白いけれども、学問としてはもうひとつずつっきりしない。というような時期に本庶先生が颯爽と現れて、学会などで多田先生に「その遺伝子は本当にあるんですか？」というような直截な質問をされるわけです。するとみんな、そこで考え込む。そういう意味で新しい転換期が免疫学にも来ていて、現象論を頭で説明するだけではダメだ、自然科学なので、遺伝学や生化学のしっかりした基礎のところから物事を構築していくことが必要だという意識を広め、ある種の新しい波を作られた、そこで免疫学が動いたという気がします。

日本の学術の急成長はケンカする能力から生まれた!?

山極 なるほど。京大は医学、物理学、それから化学、いろいろな分野でノーベル賞を受賞しています。よくいろいろな国の人、とりわけアジアの国の学長たちから訊かれます。日本はなんでこんなにノーベル賞受賞者が多いのですかと。今年も明治維新から約150年ですが、文明開化の頃は、西洋諸国に後れをとっているといわれていて、急速に日本が西洋化した時期でしたね。それで1949年に湯川秀樹先生がノーベル賞を取られた時、これで日本の学術は世界に追いついた、あるいは追い越したとも言われた。こんな短期間で、日本よりずっと進んでいると言われていた、とりわけ自然科学のレベルを乗り越えた、しかも21世紀に入ってからノーベル賞受賞者はアメリカに次いで多いと言われていました。この力はどこから生まれてきたのか、というのは、とりわけ東南アジアの国々にとっては驚異だと思うんですね。そういうと



ころはどう感じられますか。

本席 それは非常に難しい質問ですね。京都賞という賞がありますね。これはもちろんノーベル賞ほど有名じゃないけれども、これがすごいのは、日本人だけで選考するわけです、全部。国際賞で、選考過程を自国だけで全てやれる力があるのは大したものだと思います。京都賞は、元総長の井村裕夫先生が制度設計に関わられたわけですが、第1回の京都賞授賞式が1985年で、2019年には第35回になりますね。

山極 そうですね。すばらしい歩みだと思います。

本席 それほど前に、世界の進歩に対して全部目配りして、その評価も日本の研究者でやるといふ、大きな決断をされた。それは世界の国際賞といわれる中でも少ないと思いますね。そういうことがなぜ可能になったかというのが、今の山極先生の命題ですが、僕はひとつ、アジアと違うのは、日本語で教育していることだと思います。物理学も化学も、若い時に日本語で教えられるというのは、アジアの諸国と違うかも知れない。そういう概念的なことが、ずっと頭に入るからかもしれない。

山極 なるほど。研究担当理事として湊先生は、今の若い世代、特に若手の研究者の力が少し弱り始めていると言われてはいますが、この本席先生の言葉をどのようにお考えでしょうか？

湊 本席先生や早石先生の時代は、場合によっては単身、当時の先進的なヨーロッパやアメリカへ出かけて行って、ラボの中に入り込んで、揉まれたわけです。西も東もわからないけれど、とにかくいろいろな国の人間がいる中で揉まれる経験をして、また日本へ帰ってくるというプロセスがあったと思いますが、最近の若い人はどうなんでしょうか、あまり行かない。彼らに訊くと、あまり外国に行く必要も感じなくなったと言う。日本にいればそれなりにいい設備も研究室もあるからと。



山極 私も今西さんから「お前らの学問的最先端はジャングルだ」と言われてアフリカに行っていました。実は今西さんは、ドイツ語もフランス語もよくできて、文献も非常によく読んでおられて、海外の研究室を回った時に論破して歩くわけです。それだけ外国語も堪能だった。私も、アフリカのジャングルでアメリカやイギリスの最先端の研究者に出会って、そこで…

本席 そこがラボなわけやね。

湊 ラボだね。現場だよ。

山極 そこで本席先生がおっしゃったように、思考の回路の違いというものを見せつけられるわけです。そこを体験しないと…

湊 そこである程度、議論せざるを得

ない。しかし日本で、いい環境の中になんとなくいると、ある程度パターンが決まっただけで、こうやればいい、こうやったら論文は書ける、という具合で、切磋琢磨というか、揉み合いをあまり経験しない。

本席 そうそう、だから日本にいることの最大の問題は、ケンカしないことですね。(笑)

湊 そう、ケンカしない。議論しない。

本席 外国に行くと、英語でケンカしないといけない。だから手を使わずにどうやってケンカできるか(笑)、このトレーニングがやはり大事だと思う。

湊 施設や研究設備など日本はよくなったとはいえ、そういうやり合うことは、まだ日本にはあまりないと思うんです。そういう意味で若い人は向こうへ飛び込んで、向こうの連中とやり合うべきでしょう。向こうへ行くと、年齢の上下とかクラスとかあまり関係なしに議論しますから。若い時からそういうことを経験して、また日本へ帰ってくるというプロセスがないと、日本で優等生で育った人たちは、実験などはたしかに上手なんですけど、何か物足りない。

京都という土地、京都大学という大学で研究すること

山極 もうひとつ、京都と京都大学の文化的共通性について、何かお感じになっていますか。

本席 京都といえば古い文化というふうには一般的には取られてるんだけど、実は京都には新しい企業がいっぱいできています。しかもみんな京都から出て行かない。それは、まだ直接訊いたことはないけれども、それなりの理由があって、成功していると思うんです。大阪発の企業は残念なことに、東京に全部行っちゃって、大阪の町は寂れてしまった。そこがちょっと違う。町を愛しているから京都に残ったのか、京都の文化の中に企業にとっていいものがあったのかは、これは訊かないと分かりませんが、大学としてメリットがあるのは、やはり生活がのんびりしていること。僕は東大に5年間いた時、通勤に片道1時間半、電車にかかるわけ。これはね、かなりの exhaustion (疲労) です。それで僕は、必ず座れる始発の電車に乗って横浜から東京まで40分ぐらい、座って本が読める環境を作るよう努力したけれど、普通はなかなかそうはいきませんよね。

湊 それは難しいですね。

山極 私も東京だと中央線で満員電車に乗らなくちゃいけない。京都に住むと、満員電車を経験する必要がないんですよ。定期を持つ必要がない。自転車でも通えるし。これは学術に携わる者としては、大変恵まれた環境ですね。近くに哲学の道もあるし吉田山もあって、思索にふけることもできる。高等研究院長の森 重文 先生が、数理解析研究所長の時代によく「お金は要らない。静謐な環境だけがほしい」とおっしゃっていました。やはりそういう静かに考えられる時間が、京都と京都大学にはあるというのが、いいのかもしれないですね。

「役に立つ研究」とノーベル賞受賞の意義

本席 京大の学風でひとつ僕、欠点を感じたことがあります。実は、免疫学の分野では先輩になる先生が理学部において、ある会合でディスカッションをしていた時、僕が話をしたら、「本席先生、それは役に立つ学問ですなあ」と、いかにも軽蔑の目で発言されたわけです。

山極 ほう。

本席 僕はね、しばらく意味がわからなかった。ぼかーんとして。後でよく話をすると、理学的な精神から見て、「すぐ」役立つような学問は下品な学問だと。

湊 下品な学問…(笑)

本席 医学部の連中は、そういうことばかり考えていると。ただ、そこまで考える必要はないと僕は思う。50年前は別として、今の時代、サイエンスというのは、けっこう役に立つんです。思いがけずね。逆に言うと、研究者も「ひょっとするとこれは世の中の役に立つかもしれないなあ」ぐらいは、思ってもいいんじゃないでしょうか。

山極 うん、たしかに。

湊 そうですね。ここまで技術が発達すると、非常にベーシックなコンセプトが出ると、すぐにも役に立つところまで手が届く時代になっている。100年後には何とかなるだろうみたいな悠長な話ではなく、上手くやったらすぐ使えるんじゃないか、みたいなところまで時代は来てるんじゃないでしょうか。

山極 僕も湊先生も在学していた1970年代の初めは、産学協同なんてとんでもない、という時代でした。

湊 そうそう、とんでもない(笑)。

山極 とりわけそれは理学部とか文学部に強かったですね。

湊 恥ずべきことだ、とね(笑)。

山極 逆に今はもう、産業界と大学が組まなければ生き残れないという時代になりつつあります。だからずいぶん短期間のうちに、この40年ぐらいのうちにがらっと変わってしまった。

湊 変わりましたね。

山極 でもその中で本席先生は、基礎から応用、実践まで、すべてやってのけられた。これから続く若い世代にとっては、いろいろなところで道標になると思うんですね。

湊 総長が言われたとおり、それは今回のノーベル賞受賞の非常に大きいところだった。そういう基礎的な仕事はいくつも出ていると思うんですけども、かつては、実際にこれが世の中の役に立つのは10年後、100年後かもしれない、というのは言い訳みたいな話だったわけです。今はやろうと思えばできる時代になってきて、本席先生は今回、最後まで一貫してやられたということが、非常に大きな意義があったんじゃないかと僕は思います。

山極 最初から応用、実践まで目指されていたんですか。

本席 それは時々聞かれるんだけど、僕がPD-1分子を発見した時は、とてもがんとか病気の話なんて想定だにできない。つまりどういう機能かわからないわけです。機能を解析していくうちに、これはなかなか重要な分子じゃないかということがだんだん分かってきて、そこまで来ると、実はがんや自己免疫に応用する、臓器移植に応用するということは、誰でも考えることなんです。免疫を制御したらいろいろなことが起こるだろうという想定は、すでに世の中にいっぱいありましたから。結局はその新しい分子を見つけてきちんとした機能が分かると、後はもう先に光が見える。

湊 僕の場合はね、ちょっと違うんです。そこまで行っても、先に進めない。頭の中では、これだけコンセプトがはっきりしているから、ヒトのがんにも使えるだろうと分かっているんです。それでもその先に行けないというのは、僕はがん患者をいっぱい見てきたということがあります。何かをいじくるぐらいで、こんなひどいがんが治るはずないだろうと、頭の中にずーつとある。これは、トラウマみたいなものです。本庶先生にはそれがないので、「行けるはずじゃないか」とおっしゃる。僕なんか「この人は脳天気な人だな」と思ってるわけ(笑)。

山極 うーん、いやすごいお話ですね。

湊 本庶先生がやられたようなトリックで、実際に非常に致死率の高い末期がんが治ることがあるなんて、ものすごい驚きです。多くの現場の医者は敗北主義で、「マウスでは治るかも知れないけれど、あんなもんでヒトのがんが治るわけないだろう」と思っているわけです。そういうことがひっくり返ったということが大きいですよ。

学生たちへのメッセージ

山極 最後に聞いておきたいのですが、これから京都大学へ入ってくる学生がたくさん本庶先生を目指すと思います。彼らに言葉を投げかけるとすれば、どういう言葉でしょうか？

本庶 自分がほんとにやりたいことというのをしっかり意識して、それに賭ける。同じ一生です



から、京大に入ってきて、もし研究を目指すというのであれば、それに賭けようということですね。まあ賭けても、命は取られないんだから(笑)。これだけ豊かな社会なんだから。ぜひ、一生を賭ける仕事を見いだして、「負けて元々」でやったらいいと思います。

山極 そういうシーズはまだまだ京都大学にたくさんありますか。

本庶 たくさんありますよ。京都大学というか、生命科学全体はまだまだ、わからないことばかりですし、どこに何が眠っているか誰にもわからないですから。

山極 そうですね。ありがとうございました。

[目次に戻る ↗](#)

晩餐会でのスピーチ

12月10日(月)には、授賞式に続いて午後4時30分(現地時間)から、ストックホルム市庁舎の青の広間において晩餐会が開かれ、1,300人を超える人が参加し、受賞を祝いました。本庶 佑 特別教授は、カール16世グスタフ国王らが並ぶ中央の席で、オーケストラの演奏やダンスが催されるなか、地元の料理を味わいながら、王室関係者らとの談話を楽しみました。

本庶特別教授は、晩餐会の最後に、生理学・医学賞受賞者を代表して英語でスピーチを行い、がん免疫治療の改善によって、地球上のあらゆる人が健康な人生を送れることを願うとともに、深い感謝の気持ちを表しました。

Your Majesties, your Royal highnesses, excellencies, dear laureates, ladies and gentlemen,

On behalf of Professor Jim Allison and myself, I wish to express our heartfelt appreciation to the Nobel Assembly of the Karolinska Institute and the Nobel Foundation.

Cancer has been the No. 1 cause of death during the last half-century. The trend is getting even worse as the average life span increases.

The concept of cancer immunotherapy was theoretically proposed by the Australian Nobel laureate Sir Frank Macfarlane Burnet over sixty years ago, and since then, a large number of people have tried to apply it, but without success. This was probably because their efforts focused on pushing the accelerators of the immune system. Jim and I independently discovered that the reactivation of the immune system by blocking two major negative regulators, CTLA4 and PD-1, can cure a significant portion of cancer patients. Fortunately, our experiments in mouse models



生理学・医学賞受賞者を代表してスピーチする本庶特別教授

国王・王妃両陛下、王室の方々、各界の権威の皆様、受賞者の皆様、ご列席の皆様

ジム・アリソン博士と私自身を代表して、カロリンスカ研究所ノーベル賞選考委員会とノーベル財団に心よりお礼申し上げます。

がんは過去半世紀にわたって死因の第一位でした。この傾向は、平均寿命が延びるにつれてますます悪化しています。

がん免疫治療の概念は、理論的には60年以上前にオーストラリアのノーベル賞受賞者フランク・マクファーレン・バーネット博士によって提唱され、それ以来多くの人が実現しようとしたことが、成功しませんでした。その原因はおそらく、免疫システムのアクセルをさらに推し進めようとしたからです。ジムと私はそれぞれ、ふたつの主な負の制御因子であるCTLA4とPD-1を阻害することによって免疫システムが再活性化し、それによって相当数のがん患者を治癒できることを発見しました。幸いなことに、マウスモデルにおける私た

were successfully applied to humans. As a result, Jim and I have experienced many occasions that have made us feel well rewarded, such as meeting cancer patients who say their lives were saved by our therapies.

Cancer immunotherapy is possible because we have a highly sophisticated immune system called “acquired immunity,” which can catch small changes in tumor cells. How could we develop such a sophisticated immune recognition system that employs gene rearrangement? The genetic rearrangement mechanism must have developed accidentally — probably about five hundred million years ago, when vertebrates evolved. Thereafter, it must have persisted through natural selection due to the advantage of surviving infectious diseases.

Considering that the chance of such mutation and selection must be unbelievably low, we human beings are all very fortunate.

Jim and I both know that the development of our discovery is just beginning, as currently only 20 to 30% of patients respond to the immunotherapy. Andy Coghlan and Dan Chen described our discovery as the cancer equivalent of penicillin, which gave rise to a whole generation of antibiotics that changed medicine, and consigned most previously fatal infections to history. We encourage many more scientists to join us in our efforts to keep improving cancer immunotherapy. We sincerely hope this treatment will reach far and wide so that everybody on our planet can benefit from this evolutionary gift for healthy life.

ちの実験は人間にも適用することができました。その結果、ジムと私は、私たちの治療法によって命を救われたと話すがん患者さんに会うなど、本当に報われたと思えるような機会をたくさん経験しました。

がん免疫治療が可能なのは、私たちの身体が持つ「獲得免疫」と呼ばれる高度に洗練された免疫システムのおかげです。この獲得免疫は、腫瘍細胞の小さな変化をも捕らえることができるからです。私たちはどのようにして、遺伝子の再構成を行う、このような洗練された免疫認識メカニズムを進化させることができたのでしょうか？遺伝子を再構成するメカニズムは、おそらくは5億年ほど前、脊椎動物が誕生した時に、偶然に進化したに違いありません。その後、伝染病を乗り越える優位性を獲得するための自然淘汰を通じて、連綿と受け継がれてきたことは間違いないのです。

そのような変異と淘汰が起こるチャンスが信じられないほど低いことを考えると、私たち人類はじつに幸運なのです。

ジムと私は、私たちの発見の臨床応用が緒に就いたばかりであることを知っています。現在のところ、私たちの免疫治療の効果が見られたのは、がん患者のうちわずか20～30パーセントにすぎないのですから。アンディ・コグランとダン・チェン両氏は、私たちの発見は、がんにおけるペニシリンに等しいと評してくれました。ペニシリンは、医療に革命をもたらしたあらゆる抗生物質の祖であり、それまでの致死性の伝染病のほとんどを過去の歴史へと追いやりました。私たちは、がん免疫治療を改善しようとする我々の取り組みに、ますます多くの科学者たちが参加してくれることを期待します。この治療法が至るところへ届き、地球上のあらゆる人々が、この進化の贈り物から恩恵を受け、健康な人生を送れるようになることを心から願っています。

Jim and I acknowledge that we were selected for this highest of all scientific honors. We accept the distinction with our deepest gratitude for the great institutions that have supported our work, for our many devoted and skilled coworkers, without whom our achievements would have been impossible, and, finally, for Alfred Nobel for his wisdom to institute the prize and the people of Sweden for a fantastic Nobel Week.

Thank you.

ジムと私は、このような科学の分野における最高の榮譽に浴したことに感謝申し上げます。私たちの研究を支援して下さった素晴らしい研究機関の皆様、献身的で有能な共同研究者の皆様—皆さん無しにはこのような業績を挙げることは不可能でした—、そして最後に、本賞を創設した賢明なるアルフレッド・ノーベル氏、素晴らしいノーベルウィークを開催して下さったスウェーデン国民の皆様への限りない感謝の気持ちとともに、この榮譽をお受けいたします。

ご清聴ありがとうございました。



晩餐会の様子



会場のストックホルム市庁舎

[目次に戻る ↗](#)

ノーベルウィークの本庶 佑 特別教授関連の動き

12月5日（水）

本庶 佑 高等研究院副院長・特別教授は、ノーベル賞授賞式に出席するため、午前中（日本時間）に関西国際空港を出発し、スウェーデン・ストックホルムに向かいました。

出発前、本庶特別教授は、関西国際空港で記者会見を開き、「本庶佑有志基金（ノーベル生理学・医学賞受賞記念）※」について、若手研究者への支援が非常に細っている現状に対して、「私も含めた国民の皆さんから支援を受けて、若手研究者が安定的に自由に研究できる環境を整えたい」と話しました。

※本基金は、本庶先生のノーベル生理学・

医学賞受賞を記念して、新たに京都大学基金内に設立されましたが、これは本庶先生が寄付したノーベル賞賞金を原資としているものです。

<http://www.kikin.kyoto-u.ac.jp/contribution/nobel/>

午後（現地時間）、スウェーデンのストックホルム・アーランダ空港に到着しました。

空港では、ノーベル生理学・医学賞コミッティ委員長およびスウェーデン政府より任命されたノーベルアタッシェのエディ・フォニョディ氏の出迎えを受けた後、ノーベル財団の用意した専用車で滞在中の宿泊先であるグランドホテルに向かいました。このグランドホテルは、ノーベル財団が招へいするノーベル賞受賞者のために用意するホテルとして知られています。

12月6日（木）

本庶特別教授は、午前9時40分からノーベルミュージアムで行われる受賞者懇談会（Informal get-together）に参加しました。

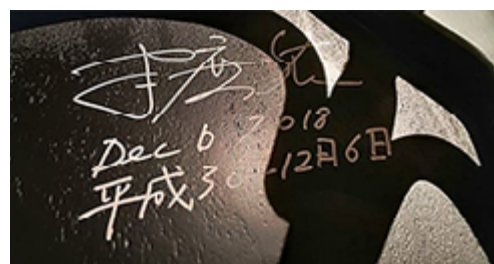
懇談会終了後は、恒例となっているミュージアム併設のカフェの椅子にサインをしました。

また、ノーベル賞受賞者の寄贈品として、本庶特別教授は、「有志竟成（ゆうしきょうせい）」と書かれた色紙を額縁とともに寄贈しました。「有志竟成」とは、「志を曲げず貫き通せば、必ず成し遂げられる」という意味で、研究を諦めることなく続けてきた、本庶特別教授の、まさに信念を世界に向けて発信するメッセージです。

午後2時、カロリンスカ研究所にて、共同受賞者であるテキサス大学のジェームズ・アリソン（James P. Allison）博士と一緒にプレス向けカンファレンスを行いました。また、午後3時か



出発前、関西国際空港で記者会見する本庶特別教授



サインした椅子



寄贈品

らは、翌日に行われるノーベル生理学・医学賞記念講演（ノーベルレクチャー）のリハーサルがありました。



プレスカンファレンスの様子
アリソン博士と共に

午後7時、生理学・医学賞コミッティ主催の夕食会がストックホルム市内で催され、本庶特別教授夫妻が出席しました。

12月7日（金）

午後2時から、カロリンスカ研究所アウラメディカでノーベル生理学・医学賞記念講演（ノーベルレクチャー）が行われました。

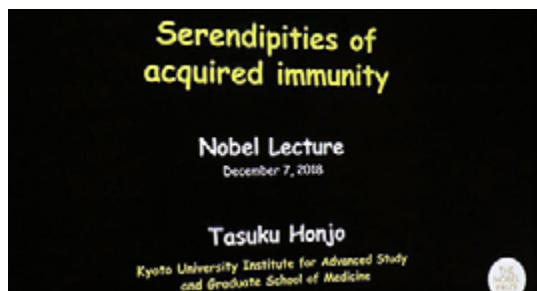
本庶特別教授は、Serendipities of acquired immunityという演題で講演を行い、さまざまな研究者、研究内容との出会いがあったことについて「私はいつも幸運だった」と繰り返し述べました。また、がん免疫療法で将来的にはがんを制御できるようになると、将来の展望を語りました。



会場の外で待つ大勢の人たち



講演する本庶特別教授



講演のスライド



講演のスライド

12月8日（土）

正午より、本庶特別教授は、在スウェーデン日本大使館によるレセプションに参加しました。冒頭の挨拶では、受賞決定の電話を受けた際に「最近ではフェイクニュースが多いから連絡を信じなかった」と冗談を交えながら話し、会場は大変盛り上がりしました。その後、レセプション参加者と懇談しました。時間に限りがあり、全ての方々と話すことはできませんでしたが、一人ひとりと丁寧に言葉を交わしました。



レセプションで挨拶する本庶特別教授



レセプション参加者と懇談する本庶特別教授

午後1時30分からは、在スウェーデン日本大使館主催の日本メディア向け記者会見が行われました。



記者会見で挨拶する本庶特別教授

午後7時からは、ストックホルムのコンサートホールにおいてノーベル賞コンサートが開催され、本庶特別教授夫妻のほか、本庶特別教授が招待したゲストの方々が出席しました。コンサートでは、チャイコフスキーの協奏曲や交響曲などが、ロイヤル・ストックホルム・フィルハーモニー管弦楽団と世界的に活躍する若手の指揮者、ヴァイオリニストによって演奏されました。



【写真左】コンサートホール正面



【写真上】コンサートの様子、【写真下】コンサートの終わりの拍手喝采

12月9日（日）

午後1時から、多くの元がん患者の団体との懇談が行われ、本庶特別教授は共同受賞者のアリソン博士とともに出席しました。冒頭の挨拶では、「あなたのおかげでがんが治ったと言われることが励みになる」と話され、続いて元がん患者の方々と懇談し、さまざまな感謝の言葉を受けました。



挨拶する本庶特別教授



元がん患者との懇談の様子



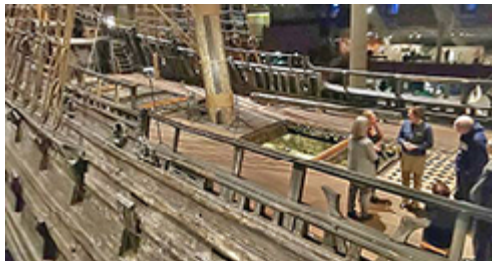
元がん患者との懇談の様子

その後、山極壽一 総長、湊 長博 理事・副学長との鼎談を行い、京都大学で研究する意義や研究者としての心構えなどについて、くつろいだ雰囲気の中で語り合いました。（詳しくは本誌P.5169をご覧ください）



鼎談の様子

午後2時30分、本庶特別教授は、17世紀に建造された王室の軍艦「ヴァーサ号」があるヴァーサ号博物館を見学し、国賓やノーベル賞受賞者しか許されていないというヴァーサ号へ搭乗しました。ヴァーサ号博物館はノーベルアタッシュのフォニョディ氏推薦の博物館で、スウェーデンの多くの方に愛されており、本庶特別教授も大変見応えがあったとの感想を述べました。



ヴァーサ号

午後6時からは、ノルディックミュージアムにおいてノーベル財団とスウェーデン王立アカデミー主催のレセプションが開催されました。

12月10日（月）

午後開催されるノーベル賞授賞式を前に、午前中にリハーサルがありました。授賞式に向かう前、滋子夫人とご一緒にメディアによる写真撮影が行われました。



授賞式出発前の本庶特別教授夫妻



グランドホテルから
授賞式に向かう本庶特別教授夫妻

午後4時30分、コンサートホールでノーベル賞授賞式が始まりました。授賞式は厳かに執り行われ、スウェーデン王国カール16世グスタフ国王から本庶特別教授にメダルと賞状が授与されました。



授賞式全体の様子

© Nobel Media AB/Nanaka Adachi



授賞式でスウェーデン国王からメダルを授与される 本席特別教授
メダルと賞状を受け取り，祝福を受ける本席特別教授

授賞式後，市庁舎に会場を移して催された晩餐会では，ノーベル生理学・医学賞受賞者を代表してスピーチし，「がん免疫療法がさらに普及することを願っている」「多くの方々のおかげで受賞することができた」と述べました。（詳しくは本誌P.5176をご覧ください）



晩餐会でスピーチする本席特別教授

12月11日（火）

授賞式の翌日，本席特別教授夫妻は，在スウェーデン日本国大使のご招待を受け，大使公邸で開催された昼食会に参加しました。

午後1時15分からは，スウェーデン議会での講演会に，ノーベル化学賞を受賞されたフランシス・アーノルド（Frances Arnold）カリフォルニア工科大学教授とともに出席しました。本席特別教授は，研究支援の重要性について冗談を交えながら話し，会場の関心を集めました。



スウェーデン議会での講演会で講演する
本席特別教授



出席した本席特別教授およびアーノルド教授

その後は、スウェーデンで伝統的なコーヒーブレイク Fika が行われ、コーヒーを片手に国会議員や講演会の参加者たちとしばしの歓談を楽しみました。



コーヒーブレイク Fika で参加者と懇談する
本席特別教授

記者からインタビューを受ける本席特別教授

19時30分からは、王宮においてスウェーデン王室主催の晩餐会が開催され、本席特別教授夫妻が出席しました。

12月12日（水）

午前10時、カロリンスカ研究所内のノーベルフォーラムで、カロリンスカ研究所の医学生らとの交流イベント「Meet the Laureates」が開催されました。本席特別教授は共同受賞者のアリソン博士とともに講演を行い、学生とディスカッションを行いました。



京都大学の博士号を持つ学生と話す
本席特別教授

アリソン博士とともに講演する本席特別教授

午後2時からは、イギリス BBC 放送とスウェーデン SVT 放送の共同制作となるテレビ番組、「ノーベルマインズ (Nobel Minds)」の収録がコンサートホールで行われました。この番組は、生理学・医学、物理学、化学、経済学の各ノーベル賞受賞者が座談を行うというもので、分野を超えて活発な議論を交わされました。本席特別教授は、収録前に共同研究者である湊理事・副学長と談笑し、リラックスした雰囲気での収録に臨みました。



「ノーベルマインズ」の収録風景

午後7時からは、ノーベル財団においてノーベルウィーク閉幕レセプションが開催され、本席特別教授夫妻が出席しました。

12月13日（木）

本庶特別教授は、ノーベルウィークすべての予定を終え、ストックホルム・アーランダ空港から午後（現地時間）発の飛行機で帰国の途につき、翌14日（金）午前10時（日本時間）に関西国際空港に到着しました。

帰国後、本庶特別教授は関西国際空港で記者会見を開き、「大変素晴らしいもてなしで、気分良く帰ってまいりました」、「貴重な体験ができました」と語り、受賞したノーベル賞のメダルを披露しました。



最終日のノーベル財団訪問を終え、空港に向かう本庶特別教授夫妻

また、記者から来年の抱負についての質問が出ると、「できるだけ自分のペースで研究をして、若い研究者をエンカレッジするような仕事、基礎研究をしっかりサポートしてもらえるように努力をすることができればいいと思っています」と話しました。



帰国後、関西国際空港で記者会見する本庶特別教授

[目次に戻る ↗](#)